

「世界の諸地域」学習の導入の指導事例

～移行期における地図帳活用～

東京都中学校教諭

1 地図帳の構成は州別・地方別である

現行の教科書(「社会科 中学生の地理 初訂版」)には掲載されていない新学習指導要領の内容(世界と日本の諸地域)を学習するうえで、現行の地図帳(「新編 中学校社会科地図 初訂版」)をどのように活用するか。

高さによって色分けされている基本図、土地利用のようすがわかる拡大図、個別の主題に基づいてつくられた資料図、巻末の索引の前にある統計資料、これらはいずれも州別・地方別に構成されており、世界や日本の諸地域の地域的特色を生徒たちが言語化し、その内容を互いに吟味しあい、理解を深めていくための絶好の共通教材である。

地図帳には、「地図を見る目」(図1)、「考えてみよう」(図2)、「やってみよう」という解説や課題の投げかけもあり、それらを読んだり調べたりすれば、地域的特色の理解に役立つ。

しかし、教室で生徒たちが同じ課題に取り組もうとするには、その地域的特色を追究する動機や意義を全員に意識させる必要がある。

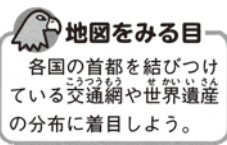


図1 地図帳p.37

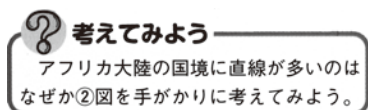


図2 「中学校社会科地図 初訂版」 p.33

2 仮想ウォークラリーのルート探究

世界の諸地域の学習で取り上げる地理的事象は、六つの州に暮らす人々の生活の様子が生徒自身の実感と結びついても正確に把握できる具体的な事例でなければならない。また、主題設定の前には、各州の自然、産業、生活・文化、歴史的背景などについて概観し、基礎的・基本的な知識を身につけさせる必要がある。さらに、主題は州ごとに異なるものを設定することや、日本との比較や関連を図る視点をもって設定し、日本の国土認識を深めるうえで効果的な学習にすることも求められている。これらの条件が満たせるような授業実践を構成していくために、単元の導入として次のような学習課題を考えてみた。

北海道の知床岬から鹿児島県の屋久島までの直線距離と同じ距離を世界で何十日間かけて歩くツアー(仮想ウォークラリー)を企画したい。できるだけたくさんの国を通過できることが望ましい。六つの州のうち、どの州でどのようなルートによって実施することが、参加者にとって気候や土地の高低差などの負担がより少なくなるだろうか。

「そんな長距離は歩けない!」という声は聞き流して、まず知床岬から屋久島までのおよその距離を調べさせる。地図帳p.151などの地図で計算させると、約2000km(フルマラ

ソン47回分以上の距離)であることがわかる。

後で述べる、「地図の使い方の誤りに気づかせる」というねらいを意識して、まずは地図帳p.1~3(図3)で探させる。すると、赤道付近で条件を満たすルートがあることに気づく。ギニア湾岸に沿って歩くルートである。



図3 ミラー図法の世界地図(「中学校社会科地図 初訂版」p.1)

この解答については、「何月ころのツアーですか」と投げかけて、気候の特色に気づかせる。「熱帯なので雨季・乾季はあっても四季の区別はなく、どの月でも気温が高くて歩くのは厳しいのではないか」という意見が出てくるのを期待する。

3 「世界の諸地域」学習の主題設定例

アフリカの場合は、「なぜギニア湾岸には(京都の町家のように)細長い形の比較的面積が小さい国が並んでいるのだろうか」という疑問を手がかりに、地図帳p.33の基本図①

「アフリカ」から、奴隷海岸・黄金海岸・象牙海岸(コートジボワールという国名の意味でもある)・穀物海岸という地名とその意味に気づかせたい。資料図②「アフリカの独立国」から州全体の特色として「ほとんどの国がかつてヨーロッパ諸国の植民地であった」とこと、統計資料でアフリカ各国の「おもな輸出品目」(地図帳p.130、132)を確認し、「第一次産品の輸出にたよる経済」を主題とした学習に結びつけることもできる。

さて、地図帳p.1でアフリカから視線を北に移すと、比較的面積が小さい国が多いヨーロッパが、仮想ウォークラリーの次の候補としてあがってくる。ヨーロッパの地中海地方は山地が多いが、中央部は日本での関東地方のように、平地が広がり、気候も温帯に属して比較的温暖であろうこと、道路も整備されていること、「行ってみたいと思う国」が多いことなど、ツアー企画の好条件がそろっていることに気づく。

ただし、ミラー図法(図3)では、正しい距離はわからない。ここまで地球儀をあえて使わなかった理由は、ミラー図法の地図について、地球が円筒状に表現されているイメージをもたせて、高緯度ほど実際より大きく描かれていることを確認するためであった。

実際の2000kmに近い距離を確かめるには、地図帳p.35~36の基本図を活用する。生徒には、「ヨーロッパで少しでも楽に多くの国を歩ける2000kmのルート」を考えさせ、200m以下の低い土地だけで2000km歩けるルートがあることを発見させる。なお、日本でも、長距離をほぼ平地上だけで移動できるルートがある。つまり、日本の国土は非常に細長いだけでなく、海岸沿いの地域などを結びつける陸上の移動ルートが確保でき、太平洋ベルトの

形成にも寄与している面があることがわかる。

さて、ヨーロッパに関しては、次の発問を試みよう。

ヨーロッパ中央部は、平原が広がっているため周辺の国に移動しやすい。この利点は何？

二つの世界大戦についてはまだ学習していないので、地図帳p.35の②「ヨーロッパの国境の変化」から、「軍隊も（他国を侵略するために）容易に移動（進軍）できた」（逆に、軍事的な小国にとっては強国に侵略されやすかった）ことに気づかせた後、「移動しやすい利点」に着目し、「地域統合」を主題とした学習を展開できよう。

ツアーの設定にバリエーションを加え、「ほとんど景色が変化しない2000kmの旅」として、アメリカ合衆国の畑作（綿花）地帯やブラジルの広大な熱帯林に気づかせ、北アメリカの大規模農業や南アメリカの森林の環境問題を主題として設定することもできよう。

4 統計資料で概観→資料図で確認の流れ

地図帳の資料図によって、各州の地理的特色が概観できるのはいうまでもないことだが、新学習指導要領の内容では州全体をくまなく学習するわけではないので、網羅的な見方ではなく、「概観している」と実感できる何かを導入にはふさわしい。そこで、情報量がしぼられており、言語化が比較的容易な統計資料から生徒が予想を立て、資料図で確認・検証していくという導入→展開の流れをつくることもできる。

人々が信仰している宗教が最も多様なのはどこの州？

「世界各地の人々の生活と環境」で世界のおもな宗教の分布を学習した生徒に、国別の

状況を統計資料の「おもな宗教」から読み取らせる。色分けされている州別に見ると、ヨーロッパ、北アメリカ、南アメリカではキリスト教が中心であるのに対し、アフリカではイスラム教と精霊信仰が加わり、さらにアジアではユダヤ教、ヒンドゥー教、仏教、儒教、神道などが加わる。地図帳p.125の②「世界の宗教」のような世界全体の宗教分布図では描ききれない内容が、地図帳p.29の②「東南アジアの人々」のA「宗教」ではより詳しく表現されていることに気づかせる。

こうして、アジアについては「多様な民族・文化」に関連した主題が設定できよう。そもそも「アジア」とはヨーロッパの人々が考え出した地域概念であり、地理的にも「アジアは一つ」とはいいにくいことを、主題に基づいて説明することが可能である。

他の項目では、たとえば「第1位の貿易相手国」から地域内の結びつきが強い州としてヨーロッパや北アメリカ、他の特定の国や地域との結びつきが強い州としてアフリカや南アメリカに着目することもできる。

5 「日本の諸地域」学習にも役立つ統計

日本の諸地域の地域的特色を理解するうえでも、地図帳の統計資料を役立てることができる。たとえば、統計の各項目の上位5位までが赤字で示されていることを利用して、地方別に見て2県以上が5位までに入っている項目に着目し、それが地域的特色として本当に説明できるかどうかを拡大図や資料図で確かめるのである。「考察の仕方」は7通りあるわけだが、統計資料から読み取ることができ、地理的諸条件とも結びつけて説明しやすい農業・工業の特色は、ほぼすべての「中核とする事象」との関連で考察できる内容である。